

第3章

和解剤（わかいざい）

和解剤とは、とうじや透邪・げうつ解鬱・そちよう疏暢・ちようわ調和などの方法により、少陽半表半裏の邪を解除したり、肝脾不和・脾胃不和などを改善するもので、八法のうちでは「和法」の範疇に入る。

和解剤は元来は少陽経（三焦・胆）の病証に対して設けられたものであるが、胆経の病変は表裏をなす肝経に影響を及ぼし、肝病も胆に容易に波及し、肝胆の疏泄失調は脾胃に影響を及ぼしやすいところから、肝胆・脾胃の気機失調も和解法で治療するようになった。このほか、「瘧ぎやくは少陽に属す」ともいわれ、瘧疾に対する治瘧剤もこの範疇に入る。

以下に、和解少陽・調和肝脾・調和脾胃・治瘧について述べる。

第1節 和解少陽剤（わかいしょうようざい）

和解少陽剤は、邪が少陽（胆・三焦）にあり往来寒熱・胸脇苦満・悪心・食欲不振・口が苦いなどの症候を呈するときに用いる。邪が少陽の半表半裏の間にあるので、半表の邪を透解するとともに半裏の邪を清泄する必要がある。

柴胡・青蒿・黄芩を主体にすることが多い。

小柴胡湯（しょうさいこうとう）

《傷寒論》

〔組成〕 柴胡 15g 黄芩 9g 人参 6g 半夏 9g 炙甘草 6g 生姜 9g 大棗 4g

〔用法〕 水煎服。

〔効能〕 和解少陽（通調少陽枢機・達邪外解）

〔主治〕 少陽半表半裏証

（1）風寒散漫少陽

往来寒熱・胸脇部が脹って苦しい・食欲不振・胸苦しい・悪心・口が苦い・咽の乾燥感・目がくらむ・舌苔が薄白・脈が弦など。

（2）熱入血室

往来寒熱・胸脇部が脹って痛む・下腹部が硬くなり痛む・夜になると言語錯乱や意識の異常が生じる・月経が途中で停止したり月経期ではないのに来潮する・身体が重い・頭汗・舌苔が薄白・脈が弦など。

〔病機〕 風寒表邪が少陽（三焦・胆）の半表半裏に侵入し、邪正相争により少陽気機を阻滯して陽気と水津の布散と転輸を障害し、少陽枢機不利をきたした状態であり、いわゆる「柴胡証」である。

三焦の半表半裏で邪正が相争して気機を阻滯しているために、正気が表に外達して邪を駆出するのが妨げられるとともに、衛陽が鬱阻されて肌表を温煦できないので悪寒が生じ、邪正相争で発生する陽熱が鬱して壅盛になり体表にまで外犯すると熱感が発生し、邪気との相争で正気が消耗するにつれて熱感は消退する。正気が再度充足するまでは、同様の経過がおこるために、まず悪寒が生じついで熱感があらわれるという「往来寒熱」がみられ、悪寒と熱感の順序

が変わらず境界も明らかなことが特徴である。なお、邪正相争が継続しているので体温はひきつづいて正常より高く、熱感が生じたときには体温はより増高する。少陽の経脈は胸脇部を循り、経気が阻滞されるために胸脇部が脹って痛み（胸脇苦満）、阻滞がつよくなると脇下が硬く脹る（脇下痞鞭）。気機阻滞により胆気が鬱して化火すると、胃に横逆して胃気を上逆させ食欲不振・悪心・腹痛をひきおこしたり、胆火上炎により口が苦い・咽が乾く・目が眩むなどがあらわれる。三焦水道が阻滞されるので水湿が停積し、心を上擾すると動悸が、肺を上犯すると咳が生じ、水津の膀胱への下輸が阻害されると小便不利（尿量減少）がみられる。舌苔が薄白は化熱が明らかでないことを、脈が弦は少陽経気が鬱していることを示す。

外邪が半表半裏に侵入して化熱し、三焦を通じ血室に侵入したものが、「熱入血室」である。血室は子宮に相当し、内は衝脈に通じ外は陰道（膻）に通じ、月経を主る。外邪が血室に侵入し、熱邪が迫血妄行すると月経期ではないのに月経が来潮したり、熱邪が血と結すると月経期間中であるのに中断する。なお、熱病の経過において月経が開始したり終了する場合にも、血室の機能の変化に乗じて熱邪が侵入し、熱入血室を生じることがある。邪が三焦の半表半裏にも散漫しているために往来寒熱・胸脇苦満・脈が弦などがみられ、熱邪が衝脈血分にまで侵入して結すると下腹部が硬くなって痛み、血分の邪熱が神明を上擾すると夜間に言語錯乱や意識の異常がみられる。少陽枢機が阻滞されるので身体が重く、邪熱が津液を上蒸すると頭汗がみられる。なお、熱邪がすべて裏で結した場合には、一時的に解熱して脈が遅くなることがあるが、治癒したわけではない。

【方意】本方は、少陽半表半裏証に対する主方であり、少陽枢機を通調して達邪外解する。

主薬は少陽の専薬である柴胡で、軽清昇散により少陽の気機を通達し疏邪外透する。苦寒の黄芩は、少陽の鬱熱および鬱変した胆火を清する。柴胡で散じ黄芩で清することにより祛邪する。半夏・生姜は辛温で和胃降逆・散結消痞し、黄芩とともに辛開苦降に働く。益気の人参は扶正によって散邪を助け、大棗・炙甘草・生姜は中焦を振奮し衛気を宣発し、邪が裏へ侵入するのを防止する。全体で祛邪を主とし正気にも配慮して胃気を和しており、「上焦は通ずるを得、津液は下るを得、胃気よりて和し、身に澌然と汗出でて解す」の効果が得られ、汗・吐・下によらず邪を除くので「和解」と称する。

【参考】

- ①《傷寒論》には「傷寒五六日、中風、往来寒熱、胸脇苦満、^{もくもく}嘿嘿として飲食を欲せず、心煩し^{しばしば}喜嘔し、あるいは胸中煩して嘔せず、あるいは渴し、あるいは腹中痛み、あるいは脇下痞鞭し、あるいは心下悸し、小便利せず、あるいは渴せず、身に微熱あり、あるいは咳するものは、小柴胡湯これを主る」とある。邪が少

陽三焦・胆にあり、胆は相火の腑で化火しやすく、三焦は陽気と津液の通路で全身に分布し広汎であるために、邪によって気機が鬱阻されると、全身に多様な病変があらわれることが示されている。

それゆえ、「傷寒中風、柴胡の証あり、ただ一証を見ればすなわち是、必ずしも悉くを具えず」と指摘しており、少陽枢機不利にともなった症状がみられれば、本方を使用してよい。基本的には、往来寒熱・胸脇苦満・舌苔が薄白・脈が弦などを備えるべきである。

② 方後には詳細な加減法が示されている。

「もし胸中煩して嘔せざるものは、人參・半夏を去り、栝楼実一枚を加う」は、胸中に熱が聚り胃気上逆がないので、助火の恐れがある人參と降逆の半夏は不要であり、甘寒で開結散熱・除煩に働く栝楼仁を加える。

「もし渴すれば、半夏を去り、加うるに人參は、前に合し四両半と成し、栝楼根四両」は、傷津による口渴があるときは、辛燥の半夏を除き、益気生津の人參を増量し、生津清熱の天花粉（栝楼根）を加える。

「もし腹中痛むものは、黄芩を去り、芍薬三両を加う」は、胆病及肝で肝気乗脾の腹痛が生じたときは、苦寒で傷脾する恐れのある黄芩を除き、平肝止痛の白芍を加える。

「もし脇下痞鞭すれば、大棗を去り、牡蛎四両を加う」は、水気の結滯を兼挟するか結氣して鬱滯が甚だしいために痞鞭が生じているので、甘温で気機を壅滯させる大棗を除き、軟堅散結の牡蛎を加えている。

「もし心下悸し、小便利せざるものは、黄芩を去り、茯苓四両を加う」は、少陽枢機不利で水津の布散と転輸が障害されて飲邪が生じ、心下に停積して動悸と小便不利をきたしたものであり、苦寒で傷脾し水湿停滯を増悪させる恐れのある黄芩を除き、利水滲湿の茯苓を加える。

「もし渴せず、外に微熱あるものは、人參を去り、桂枝三両を加え、温覆し微しく汗すれば癒ゆ」は、表証が残っているので、祛邪の妨げになる人參を除き、桂枝を加えて解肌発表する。

「もし咳するものは、人參・大棗・生姜を去り、五味子半升・乾姜二両を加う」は、飲邪が肺を犯して咳嗽が生じているので、壅滯をつよめる恐れがある人參・大棗を除き、生姜を乾姜にかえて、斂肺止咳の五味子と温陽散飲の乾姜の配合で温肺止咳・散飲する。

③ 《傷寒論》には、小柴胡湯の加減方として以下の諸方が示されている。

◎大柴胡湯（だいさいこうとう）

別項で詳述。

◎柴胡加芒硝湯（さいこかぼうしょうとう）

組成：小柴胡湯の1/3量に芒硝6gを加える。水煎服。

「傷寒十三日解せず，胸脇満して嘔し，日晡所潮熱を發し，おわりて微しく利す，これ本柴胡証，これを下しもって利を得ず，今反って利するは，医もって丸薬にてこれを下すを知る，これその治にあらざるなり，潮熱は，実なり，まず小柴胡湯を服しもって外を解すべし，後もって柴胡加芒硝湯これを主る」

風寒が遷延して少陽半表半裏に入り「柴胡証」を呈するとともに，日晡潮熱を發する陽明熱盛を兼挾している。先表後裏の原則にもとづき，まず半表半裏を小柴胡湯で和解したのち，少量の小柴胡湯と大量の芒硝で陽明腑熱を清する。

◎柴胡加竜骨牡蛎湯（さいこかりゅうこつぼれいとう）

組成：小柴胡湯の半量を用い，甘草を除き，竜骨・牡蛎・鉛丹・桂枝・茯苓各4.5gと大黃6gを加える。水煎服。

「傷寒八九日，これを下し，胸満煩驚し，小便利せず，譫語し，一身尽く重く，転側すべからざるものは，柴胡加竜骨牡蛎湯これを主る」

表証を誤下して邪が内陷し，少陽枢機を阻滯すると同時に厥陰（肝・心包）にも影響が及んだ状態であり，少陽・厥陰の気機が阻滯され流展できないために全身が重くて転側もできず，三焦が阻結され水道が通じないので尿量が減少し，厥陰で鬱した肝火が心を上擾するために胸が脹る・驚きやすい・うわごとなどがみられる。小柴胡湯で少陽枢機を疏通し，桂枝で残存する表邪を解するとともに少陽枢機の開通を補助する。苦寒の大黃は厥陰邪熱を下泄し，鉛丹・竜骨・牡蛎は鎮心安神し，いずれも厥陰を安和にする。利水の茯苓は水道を通利して三焦の阻結を緩和するとともに，安神にも働く。病勢が深く病状が急であるから，緩和の甘草は除いている。

なお，本方の鉛丹は毒性があるために使用されず，鉛丹を除いた処方を外感病以外に用いることが一般的である。少陽・厥陰を通利し，清熱・安神・祛痰などの効能を備えているので，内傷七情で肝鬱化火して脾を傷害し，痰が生じて少陽・厥陰の枢機を阻滯したために生じる不眠・動悸・めまい・情緒不安・遺精・インポテンツなどに適用する。

◎柴胡桂枝湯（さいこけいしとう）

組成：小柴胡湯と桂枝湯の半量ずつを合方したもの。水煎服。

「傷寒五六日，發熱し，微しく悪寒し，支節煩疼し，微しく嘔し，心下支結し，外証いまだ去らざるものは，柴胡桂枝湯これを主る」

發熱・微悪寒・関節痛など表証（外証）があり，同時に邪が少陽心下に深入したための微嘔・心窩部の痞えがみられるので，解表と和解少陽を同時に行う。

◎柴胡桂枝乾姜湯（さいこけいしかんきょうとう）

（別名：柴胡桂姜湯・柴胡姜桂湯・姜桂湯）

組成：柴胡15g，桂枝9g，乾姜6g，天花粉12g，黄芩9g，牡蛎6g，炙甘草6g。水煎服。

「傷寒五六日、すでに汗を發して復たこれを下し、胸脇滿し微^{すこ}しく結し、小便利せず、渴して嘔せず、ただ頭汗出で、往来寒熱し、心煩するものは、これいまだ解せざるとなすなり、柴胡桂枝乾姜湯これを主る」

表証に発汗・瀉下したが、治療が適切でないために邪が少陽に陥入し、少陽枢機が阻滯され水飲が微結した状態である。少陽経気が邪と水飲に阻滯されて胸脇滿と微結がみられ、水道不利のために尿量が減少し、津液が上承できないので口渇がある。邪在少陽で往来寒熱し、三焦が阻滯されて鬱した胆火・邪熱が心を上擾するといらいらが生じ、水熱互蒸で水津を上迫すると頭汗がみられる。柴胡で少陽枢機を疏通し邪を透解し、黄芩で邪熱と胆火を清泄する。桂枝・乾姜は脾陽を振奮させ水飲の産生を防止するとともに、少陽三焦を辛通し飲邪を化す。天花粉（栝楼根）は清熱生津し、牡蛎とともに散結逐飲に働く。辛熱の乾姜・桂枝に対し、苦寒の黄芩が助熱を抑制し、鹹寒鎮潜の牡蛎が迫津上蒸を防止している。炙甘草は諸薬を調和する。

「もし胸中煩して嘔せざれば、半夏・人参を去る」「もし脇下痞鞭すれば、大棗を去り牡蛎四兩を加う」という小柴胡湯の加減法に沿っている。

附 方

1. 柴胡枳桔湯（さいこききつとう）《通俗傷寒論》

組成：柴胡 3～4.5g、枳殼 4.5g、姜半夏 4.5g、生姜 3g、黄芩 3～4.5g、桔梗 3g、陳皮 4.5g、緑茶 3g。水煎服。

効能：和解透表・暢利胸膈

主治：少陽半表半裏証の偏半表で、往来寒熱・両側頭痛・難聴・めまい・胸脇部が脹って痛む・舌苔が白滑・脈弦などを呈するもの。

「邪は腠理に鬱し、上焦に逆す、少陽経病の半表証に偏すなり、法まさに和解兼表すべし、柴胡枳桔湯これを主る」とあり、頭面部から胸脇という上焦の症候が主体になっており、柴胡・黄芩で半表の邪を清透し、枳殼・桔梗・陳皮・半夏・生姜で上焦を開発し祛痰・調暢胸膈の効果をあげる。緑茶は清熱降火・利水祛痰により他薬を補佐する。

2. 柴苓湯（さいれいとう）《世医得効方》

組成：小柴胡湯合五苓散。水煎服。

効能：和解半表半裏（通調少陽枢機）・利水

主治：半表半裏証あるいは少陽枢機不利で、浮腫・水様便など水湿停滞が顕著なもの。

淡滲利水の五苓散を合方し水湿の除去をつよめる。

3. 柴朴湯（さいぼくとう）《日本経験方》

組成：小柴胡湯合半夏厚朴湯。水煎服。

効能：和解半表半裏（通調少陽枢機）・理気化痰

主治：半表半裏証あるいは少陽枢機不利で、胸苦しい・咳嗽・喀痰・悪心・嘔吐など痰湿阻滯が顕著なもの。

理気化痰の半夏厚朴湯で祛痰をつよめる。

4. 柴陷湯（さいかんとう）《日本経験方》

組成：小柴胡湯合小陷胸湯。水煎服。

効能：和解半表半裏（通調少陽枢機）・清化熱痰

主治：半表半裏証あるいは少陽枢機不利で、胸痛・咳嗽・黄色粘痰・心窩部痛・舌苔が黄膩など熱痰あるいは小結胸をとともうもの。

小陷胸湯を加えて痰熱・小結胸を除く。

大柴胡湯（だいさいことう）

《傷寒論》

〔組成〕 柴胡 15g 黄芩 9g 白芍 9g 半夏 9g 生姜 12g 枳実 9g 大棗 4g
大黃 6g

〔効能〕 和解少陽・泄下熱結

〔主治〕 熱結心下

心窩部が脹って痛むあるいは硬く痞^{つか}える・悪心・嘔吐・下痢あるいは便秘・煩躁・往来寒熱・胸脇部が脹って痛む・舌苔が黄・脈が弦で有力など。

〔病機〕 風寒の邪が化熱して少陽半表半裏の偏裏である心下に陥入し、気機を痞結した状態である。

心下は少陽の偏裏に属し、少陽邪熱が陽明に内逆する門戸である。熱邪が心下に陥結して気機を阻滯するので、心窩部が脹って痛み、阻結が甚だしくなると硬く痞える。邪熱が陽明に内逆し、脾胃の昇降を阻滯すると胃気上逆の悪心・嘔吐や脾気不昇で清陽下泄の下痢がみられ、邪熱が腑気を阻滯すると腹満・便秘が生じ、心神を上擾すると煩躁があらわれる。少陽枢機不利にともない往来寒熱・胸脇苦満・口苦なども兼挟する。少陽の熱結であるから舌苔が黄・脈が弦で有力を呈する。

〔方意〕 清熱するとともに心下痞結を開通し、少陽枢機を通利する。

柴胡は少陽半表半裏の邪熱を軽宣達表するとともに少陽枢機を通利し、黄芩